

長唄のアクセント—「鶴亀」を例に—

坂本清恵

金田一春彦氏は「邦楽の旋律と歌詞のアクセント」(田邊尚雄還暦記念論集『東亜音楽論叢』昭和18年、山一書店)において、長唄のアクセントについて次のように述べている。

[引用1]

町田嘉章・杵屋弥七両氏共編の『三味線の独稽古』(下巻)の中にも、長唄とは限っていないが、歌詞が変れば、その語のアクセントによって旋律が変化すべきことを説いておられ、注意すべき文字である。

長唄の旋律は歌詞のアクセントを尊重するあまり、ある語句のアクセントが時代につれて変化を起こすと、旋律も従って変化することがあるようである。先日私のもとにいるものが、近所の長唄の師匠一杵屋六左衛門氏の系統と言う一の所へ行って「鶴亀」を習ってきたが、聞いていると、“碑礫のユキ桁、瑠璃の階”というところを[譜例19](a)のように歌っている。これは小十郎氏の譜では[譜例19](b)のように出ていたものである。この「瑠璃」なる語は山田美妙斎の『日本大辞書』には勿論のこと、神保格先生のアクセントの辞典にもNHK編のアクセントの辞典にもメ^ノオと出ているくらいで、メ^ノオというアクセントは、東京で極く新しい時代に出現したものと考えられる。このメ^ノウノハ^シという旋律は、私の近所の師匠が発明したのか、そのまた師匠が発明したのか明らかでないけれども、とにかくこのような随分新しいアクセントの変化が、早くも長唄の旋律に変化を及ぼすことは注目に値すると思う。

[譜例19]

☆(a)

メ ノ オ ノ ハ シ

☆(b)

メ ノ オ ノ ハ シ

もう一つ長唄について注意すべきは、歌う人によって語句のアクセントに近い節で歌う人と、そうでない節で歌う人とがあることである。たとえば吉住小

三郎氏の長唄と、松永和風氏の長唄とを比べると、和風氏の歌い方は、あまりアクセントに拘泥しない歌い方の特徴である。

この「メノウ」の例は、長唄が古い東京式アクセントを反映していることと、長唄がアクセント変化に従って歌い方を変える例として認識されており、金田一春彦『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房（昭和49年）においては、この「メノウ」の例を用いて、次のように長唄の古い歌唱に江戸末の東京式アクセントが反映する可能性を述べている。

[引用2]

長唄界指折りの学匠吉住小三八氏の直話によると、現在の小三郎一派のアクセントに即した歌い方は、二代目小三郎にはじまったもので、二代目小三郎は、寛政一安政のころの人だと言う。とすると、もし、現行のものがその忠実な模倣とすると、その時代のアクセント資料になるはずである。この節がどこまで忠実に伝わっているものであろうか。

東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座「邦楽の旋律とアクセント—中世から近世へ—」において¹、長唄のアクセントについて話をしてほしいと依頼を受け、上記のように金田一氏により繰り返し述べられてきた東京アクセントの「メノウ」LHLから「メノウ」HLLへの変化のように、長唄には現代東京ではあまり聞かれなくなった3拍名詞LHL型が多用されるなど、古い東京式アクセントの反映をみることができないのではないかと考え、長唄「鶴亀」を例に、長唄の譜本と音源からの考察を行ってみた。しかし、資料を揃えてみたところ、長唄による古い東京アクセントの研究はむずかしいことがわかった。本稿ではこのことについて報告する。

1. 長唄「鶴亀」

問題の「メノウ」が出てくる長唄「鶴亀」については『日本音楽大事典』（1989年 平凡社）には次のようにある。

一八五一年（嘉永四）一二月一日、南部侯麻布並木御殿で初演。作曲一〇代杵屋六左衛門。本調子一二上り一本調子。詞章のほとんどは能「鶴亀」から借用しているが、二上り「よはひに比ふ丹頂の」のくだりなど、一部の詞章は南部信侯の作か。「いかに奏聞」以下の問答、本調子の「亀は万年の」、二上り「千代のためしの」が聞かせどころ。荘重典雅な謡曲風長唄で

¹ 2015年12月18日、国立博物館平成館大講室において開催

祝儀曲としても使われている。

幕末の作曲であること、謡の詞章を取り入れたものであることがわかる。また、初演者については稀音家義丸『長唄囃話』(2015年、邦楽の友社)には初演連名は〈唄〉二代目富士田音蔵・吉住小八・木村八三郎、〈三味線〉十代目杵屋六衛門(作曲者)・杵屋六四郎・上調子杵屋三郎助です。タテ唄富士田音蔵は天保三名人の一人で「美声の音蔵」と云われた人で節の切り方を上げるクセがあり、(略)本曲でも二上りル\ひめエ小松」に音蔵の唄癖が伝えられています。

とある。成立年代から考えれば、古い東京式アクセントの反映を期待できる作品ではある。しかし、能から題材を取り入れ、詞章も共通するとなれば、謡の音楽的な要素も取り入れている可能性もある。

謡は今でこそ、譜本の胡麻章の高低を全く活かすことはないが、室町期の下掛の謡本には当時のアクセントを反映した胡麻章が施され、アクセントに合った歌い方がされていたことがわかる。現在でも節付けに京阪式アクセントの反映を聴くこともある。その謡を取り入れた曲となれば、長唄「鶴亀」に上方のアクセントが反映していてもおかしくない。

以下、長唄の譜本と古い音源によってメロディーとアクセントの関係について述べる。

2 長唄の譜本

これまで長唄に反映するアクセントについて詳しい研究が行われてこなかったのは、江戸期における譜本がほとんどなかったことによるのではないかと思う。胡麻のある譜本が皆無ではないのだが、どのように見てもアクセントを反映する胡麻とは考えにくいものしかない²。

[2-1]明治34年刊行の五線譜

「鶴亀」の歌詞のメロディーを示した古い譜としては、まず北村季晴による五線譜があげられる。北村季晴(1872~1931年)は、東京音楽学校在学中に知り合った鹿嶋清兵衛(1866~1924年)の援助で西洋楽器で長唄を演奏できるように採譜作業に取り組んだ³。北村の演奏については和洋調和楽と呼ばれ、「曾て明治音楽會の大會に於て、北村氏が洋楽の勸進帳を聞いた事があつたが、氏

² 矢向 正人・新崎 達貴(2012)「長唄正本にみる胡麻点の分類：単一胡麻の分類」『芸術工学研究：九州大学大学院芸術工学研究院紀要』17

³ 奥中康人(2010)「五線譜というメディアの登場—北村季晴にとって「採譜」は何を意味したか」『近代日本における音楽・芸能の再検討』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告5

の長唄に於ける修養の深さは、当時居合せた吉住小三郎が頻に賞揚したのを記憶して居る」(『朝日新聞』明治38(1905)年4月25日)と書かれ、長唄として評価できるものであったと考えられる。明治26(1893)年6月には、九代目団十郎の家で行われた稲荷祭で「勸進帳」を演奏し、後に歌舞伎座で三日間の演奏することになった⁴。北村の演奏は「長唄 勸進帳・月の都」(米コロンビア)でわずかではあるが、聴くことができる。

北村による長唄五線譜は、北村が主宰する大日本音楽倶楽部の演奏に用いるために明治23年ごろから27年ごろまでに採譜をしたものである。これが、明治34(1901)年の「勸進帳」を皮切りに、明治40(1907)年までの間に「鶴亀」「越後獅子」「老松」「元禄花見踊」「小鍛冶」「秋の色種」「吾妻八景」「道成寺」を共益商社楽器店から出版されている。他に北村が校閲した五線譜の曲もある。

明治34年刊行の「鶴亀」の五線譜の解説には、ヴァイオリンやピアノでの演奏のために採譜したことが示され、十三代杵屋六左衛門が協力をしていることがわかる。唄については他に協力者がいた可能性もあり、同じ共益商社楽器店の「勸進帳」について、奥中康人氏は六代目芳村伊十郎を唄のインフォーマントとしたかと記しており⁵、あるいは「鶴亀」も同様なのかもしれない。



右の五線譜上段に示された歌詞のメロディーの採譜を見ると、「メノウ」はLHLのアクセントではなく、HLLのアクセントを反映したメロディーで唄われたことがわかる。

[2-2]小十郎譜

吉住小十郎による譜が、現在の長唄譜の始まりである。吉住小十郎(江本舜平、のちに山田舜平、1886~1923年)は、純正調オルガンを発明した音響学、物理学の田中正平と同郷の淡路島生まれで、田中の邦楽研究所で西洋音楽一般と理論を学び、河東節の五線譜化の中心であった⁶。金田一氏が先にあげた論文を還暦記念に寄せている田辺尚雄は、邦楽研究のために田中正平の元に通っていたが、そこで江本舜平(のちの小十郎)に三味線の手ほどきを受けたという⁷。小十郎は田中に長唄の採譜のために派遣されていたが、大正4(1915)年から吉住小十郎として出演している。吉住小三郎(慈恭)の演奏を金屏風の後ろでメ

⁴ 加島清兵衛(1921)「和洋合奏の道成寺」『新演芸』6月号

⁵ 注3による。

⁶ 川口康子(1996)『長唄小十郎譜の成立と出版』東京芸術大学大学院音楽研究科音楽専攻 修士論文

⁷ 田邊尚雄(1968)「月島時代の思い出」『田中正平と純正調』音楽之友社

もし、譜に起こしたのが小十郎譜である。早稲田大学の卒業生の永楽倶楽部の勧めにより、大正2、3年から譜本を個人で出版するようになったという⁸。

小十郎譜は「長唄新稽古本」として刊行、それぞれの曲名の前に「節付音符並三味線譜入」と角書されている。譜は下の図のように歌詞の旋律と三味線譜をともに五線譜を数字に直して縦書きにしたもので、正本として舞台上で使える形である。1-7の数字を西洋音階のドーシに当てはめ、基本的に4分の2拍子で表記される。オクターブは数字の右(1オクターブ上)と左(1オクターブ下)に付く「・」で表す(最低音は・7)。なお、本稿では1オクターブ高いものを「・」、低いものを「.」、それぞれ「7・」「.7」のように示す。

また、小十郎譜は、昭和元(1926)年から亡くなった昭和8(1933)年までの間に『長唄楽譜』『西洋横線譜』として、五線譜の「松の緑」「吾妻八景」「越後獅子」「賤機帯」「鶴亀」も刊行されている。

今回の調査で用いた「鶴亀」の小十郎譜は、大正13(1924)年、山田舜平発行がもっとも古いものである。他に昭和8(1933)年4月発行のもの、死後に遺稿として昭和8年8月に夫人秀子氏が発行した五線譜のもの、昭和26(1951)年に邦楽社から出版されたものを見ることができた。現在も昭和22(1947)年以降に邦楽社から出版されたものが繰り返し刊行されている。すべて著作は吉住小十郎事、山田舜平で、吉住小三郎(慈恭)関、杵屋(稀音屋)六四郎(浄観)関とあり、五線譜には田中正平関が加わる。

大正13年譜 昭和8年譜 昭和8年五線譜

焦点の「メノウ」であるが、大正13年版では「755」で、HLLを反映する。昭和8年の両譜、昭和26年の譜は「575」でLHLである。金田一氏の論考は大正13年の古い譜ではなく、昭和8年までにLHLに変更された新しい小十郎譜によったことがわかる。小十郎は吉住小三郎の唄が演奏によって異なる場合には、

⁸ 長唄総合研究会(1997)『日吉小三八聞書き』邦楽社

その違いを本人に確認しているので、譜の改変は小三郎が唄い方を変えたことによる⁹。

唄い方を変えた理由は、次のように本居長世、半井桃水などの指摘による可能性が大きい¹⁰。

[引用 3]

本居先生に従えば、小三郎氏が東京アクセントに忠実な旋律で歌われるのは、明治の頃、半井桃水氏その他の人たちの建言によって、そういう歌い方を始めたもので、それ以前の長唄の旋律はアクセントを尊重するようなことはしなかったものだと言われる。その意味では和風氏のような歌い方は、むしろ古風を伝えていると言えるとのことである。

大正 13 年版と昭和 8 年版「鶴亀」の歌詞のメロディーの改変は 17 箇所にあつた。中でも高く始まる HH を LH に直すものが 5 箇所ある。語頭の改変は以下のとおりである。

おびただし	77553#4#46→57553#4#46 に
しゃこ	2・2・72・→72・72・
よはひを	33233#43→23233#43 とも
重ぬらん	33233→23233 とも
月宮殿の	6743→4673
はそで	33.7→23.7

これを見ると大正の譜は語頭から高拍が続く、京阪式アクセントの影響を受けているが、昭和 8 年の譜は、東京アクセントに合わせて改変したと考えられそうである。

[2-3] その他の譜

小十郎譜は、大正 13 年と昭和 8 年で異なつたが、その間の昭和 7 年には田邊



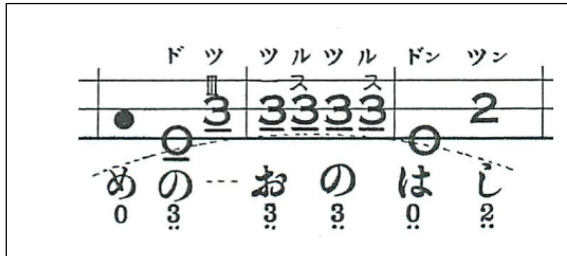
尚雄氏による五線譜『世界音楽全集』第 34 卷(春秋社)が刊行されている。五線譜としては北村季晴のもの、小十郎西洋五線譜とも異なるものである。採譜に協力した演奏者については記載がない。なお、解説には「本

⁹吉住慈恭(1971)『芸の心』毎日新聞社 179p

¹⁰金田一春彦(1943)「邦楽の旋律と歌詞のアクセント」(田邊尚雄還暦記念論集『東亜音楽論叢』山一書店)

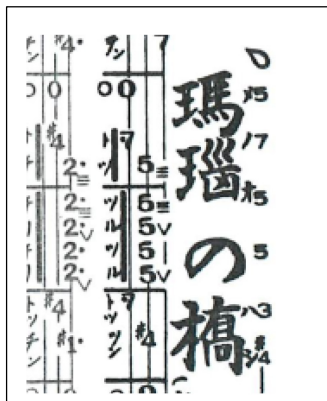
書の輯録については、例によつて田中正平博士、小十郎氏、故北村季晴氏等の多年の努力を待つところが多い。」としている。二人の譜を参考にしつつ、「メノウ」HLL を反映する譜を残している。

四代目杵家弥七による文化譜は、大正時代ものには三味線譜のみで歌詞には



音高が示されていないが、戦後に刊行された譜には、三味線譜と歌詞のメロディーが付されている。

音高を表す数字の下に点のないものが三弦、二点が二弦であるので、左の「メノウ」のはHLLを反映していると考えられよう。



杵屋彌之介 青柳茂三編「鶴亀」平成25年(藤和出版部)、青柳譜には「メノウ」に575が付されており、東京の古いアクセントLHLを反映する昭和8年以降の小十郎譜と同じである

以上のように、明治以降に刊行された譜をみると、「メノウ」には古くはHLLを反映するメロディーがついていることが確認できる。吉住小三郎(慈恭)の唄を採譜した小十郎譜では、昭和8年までにHLLからLHLに改定されたとみられことがわかった。金田一氏の述べるLHLからHLLとは逆に変更されていたのである。

3 音源による確認

譜にはHLLからLHLという改変がみられたが、実際にはどのように唄われていたのかを以下の古い音源により確認してみる¹¹。

- A. 六世芳村伊十郎 ニッポノホン 大正9(1920)年か
 - B. 松永和風 コロンビア 昭和6(1931)年
 - C. 吉住小三郎 コロンビア 昭和11(1936)年
 - D. 宮田哲男 『長唄の美学』NHKサービスセンター 平成4(1992)年
- 上記ABCについては、高桑いづみ氏に唄の部分を実録していただいた

¹¹ AからCなど古い音源は国会図書館デジタルコレクションで確認した。

た。「瑠璃の橋」の部分を示すと、左のとおりである。

The image shows a musical score for the song 'Me no U' (メノウ) in G major. It consists of three staves, each representing a different singer's version of the melody. The lyrics 'メノーノハシ' are written below each staff. Staff A (A 芳村) shows a melody with a high note on 'メ' and a low note on 'ハシ'. Staff B (B 松永) shows a similar melody but with a different pitch contour. Staff C (C 吉住) shows a melody with a lower starting pitch and a different contour. The notes are: G4 (Me), A4 (no), B4 (no), G4 (Ha), F#4 (shi).

Aの六代目芳村伊十郎の「メノウ」はHLLのアクセントを反映する唄である。六代目芳村伊十郎は複数の録音を残しているが、録音された唄は大きくは異なる。

Bの松永和風の唄でも「メノウ」もHLLを反映している。しかし、松永和風の襲名前の芳村孝次郎時代の昭和元年(1926)1月のニッポンフォン、同年10月のコロビアの録音ではこの部分は右の採譜とは異なり、低く唄われていて、HLLとしてよいと思うが、

Bほどはっきりしない。和風(孝次郎)の唄は「おびたんだし(夥)」「そんで(袖)」「なせんば(成)」など有声破裂音の前に鼻音が入ることがあるなど、同時代の長唄と比べやや古風な印象を受ける。「敷妙」を「ヒキタエ」など「シ」を「ヒ」とする。また、録音によって唄い方がかなり異なるのも特徴である。

Cの吉住小三郎の「メノウ」は最初の上昇が短いLHLを反映した唄い方をしている。ただし、明治39年2月録音の米コロビアの録音では「メノウ」HLLではないかと思う。Cの譜は昭和11年の録音であり、昭和8年の譜と同様のHLLからLHLに変更した唄い方なのであろう。

新しい録音としては、Dの宮田哲男の「メノウ」は「メ」からの「ノ」への上昇が小三郎のものよりも明確で、LHLをはっきり唄う。

以上のように、録音資料からも「メノウ」については、HLLで唄うものが古く、アクセントがLHLからHLLへ変化したのに合わせて唄い方を変えたのではないことがわかる。HLLと唄っていたものを古い東京アクセントのLHLに改めたと考えてよい。

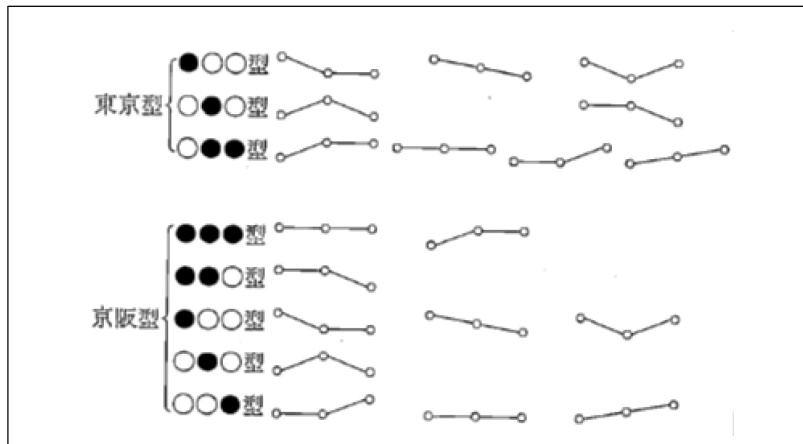
4 長唄「鶴亀」に反映するアクセント

それでは、長唄「鶴亀」はいったいどのようなアクセントを反映しているのだろうか。近世邦楽は京阪式アクセントの影響を受け、江戸出自の場合にも2拍3類名詞「雪、月、花」などには東京式のLHではなく京阪式のHLのメロディーを聞くことがある¹²。

長唄「鶴亀」の場合、謡から長唄に取り込んだ作品であることから、京阪式アクセントと、東京の古いアクセントによる作曲の可能性を考え、曲全体について検討をしてみた。メロディーがどのようなアクセント型を反映するのかに

¹² 注10の294ページなどに指摘がある。

については、金田一氏によって次のような対応表が示されている。¹³



しかし、今回は反映するアクセントが京阪式か東京式かを検討するので、京阪式の高起式無核 HHH 型の反映には1拍目が低く始まるものは認めない。また東京式の平板型 LHH の反映としては1拍目から高く始まるものは認めない。さらに、京阪式アクセントに存在する最後の拍のみ高くなるものも東京アクセントの LHH としては認めない。また、金田一氏は東京式アクセントにはないメロディーを下がり目にあわせて東京式のアクセント型に認定するが、ここではその型が京阪式には存在する場合、東京式アクセントを反映するメロディーとは認めないことにする。しかし、メロディーとしては語頭から音階が1上がって LHL になっていても、単語アクセントとしては、HLL に聞きなすこともできるので、他の認定の方法もありうる。譜の高低をどうアクセントとして読むのかについてはさらなる検討が必要であるが、とりあえず記述を試み、稿末に[資料]として、文節ごとにメロディーの高低と京阪式、東京式アクセント資料を一覧表にて示した。分析に用いたのは以下の譜と音源である。

- ・「明 34 採譜」北村季晴『長唄楽譜 第貳集 鶴亀』共益商社楽器店 明治 34 年から反映するアクセントを HL で示した。
- ・「小十郎譜 T」吉住小十郎編『長唄新稽古本』大正 13 年
- ・「A 芳村」(唄) 六代目芳村伊十郎 ニッポノホン (大正 9 年か) 唄に反映するアクセントを HL で示した。
- ・「B 松永」(唄) 松永和風 コロンビア (昭和 6 年) 同上
- ・「C 吉住」(唄) 吉住小三郎 コロンビア (昭和 11 年) 同上

京阪式アクセント資料

- ・「京(江)」『日本国語大辞典』第二版、小学館記載 江戸時代京都アクセント
- ・「京(日)」『日本国語大辞典』第二版 小学館記載 現代京都アクセント

¹³ 注 10 の 294 ページ、付表 22。

・「京(金)」秋永一枝編『金田一春彦調査京都アクセント転記本』平成15年
 参考：秋永一枝他編『日本語アクセント総合資料 索引編』平成9年 東京堂
 出版

杉藤美代子編『東京・大阪アクセント音声辞典』CD-ROM 丸善 平成7年
東京式アクセント資料

- ・「美妙」山田美妙編『日本大辞書』明治26年 日本大辞書発行所
- ・「国定」上田萬年・高橋龍雄編『国定讀本發音辞典』明治37年 秀英舎
- ・「アク」神保格・常深千里『國語アクセント辞典』昭和7年 厚生閣
- ・「放」日本放送協會編『日本語アクセント辞典』昭和18年 日本放送協會
- ・「発音」寺川喜四男・日下三好『標準日本語發音大辞典』昭和19年 大雅堂
- ・「明国」金田一京助監修『明解国語辞典』昭和27年 三省堂出版
- ・「明解」三省堂編修所編『明解日本語アクセント辞典』昭和33年
- ・「東(日)」『日本国語大辞典』第二版 小学館

以上を用いて、「京阪式アクセントに一致」「古い東京式に一致」「東京アクセントに一致」「京阪・東京両方(のアクセント)に一致」「(京阪式、東京式)アクセント(いずれにも)不一致」「アクセント不明(辞書に例のないもの)」として文節数をまとめると以下のようなになる。

	M34採譜	小十郎譜T	A芳村	B松永	C吉住
京阪式アクセントに一致	45	21	29	46	26
古い東京式に一致	5	5	4	5	6
東京アクセントに一致	47	89	78	62	84
京阪・東京両方に一致	8	10	6	7	9
アクセント不一致	47	45	53	50	45
アクセント不明	4	4	4	4	4
合計	156	174	174	174	174

明治34(1901)年の採譜にはせりふ部分がないため、他と用例数が異なる。嘉永4(1851)年にタテ唄富士田音蔵が唄ったものであるから、古い東京式が多く現れてもよいように思うが、これをみるとアクセントを反映しない部分が3分の1ほどある。明治34年の採譜と、古い唄い方と言われる松永和風氏の唄は京阪式アクセントの反映もみられ、徐々に東京式アクセントの反映が強いものへと変わったのではないかと見られる。謡からの曲であったので、京阪式アクセントも取り込んだということなのだろう。

なお、Bの松永和風とCの吉住小十郎については、町田嘉章氏が次のように述べている。¹⁴

¹⁴町田嘉章(1963)「邦楽とアクセントの問題」『言語生活』4月号

[引用 4]

詞のアクセントが節の中にあって特別注意をひくようになったのは明治以後の長唄、殊に吉住小三郎等が、従来の劇場長唄を離れて、演奏会長唄として一機軸を立てるようになって以後のこと。

この吉住小三郎に対して面白いコントラストをなしているのが二代目松永和風で、彼の長唄は彼独得のもので、語のアクセントに対しては可成り無関心な諷い方をしている。

元々、長唄はあまりアクセントに厳しくなかったが、長唄研鑽会発足以降にアクセントに拘るようになったということなのであろう。また、3でも述べたとおり、松永和風の唄い方は常に同じではなく、他よりも古い印象を受ける発音を聞くことができる。この唄い方が伝統的なものかもしれない。

以下、京阪式と東京式とでアクセントの高低が大きく異なる2拍名詞と、古い東京式である3拍名詞LHLについて例を挙げてみる。

[4-1] 「鶴」「亀」のアクセント

現代の京阪式と東京式とで高低が逆の配置になる「鶴」「亀」を例にアクセント反映について比較してみる。

本文	M34採譜	小十郎譜T	A芳村	B松永	C吉住
鶴も	LHL	3・3・2・3・3・#4・3#4・3・	LFL	LHL	LFLか
鶴も	LLH	#43#47	LLH	LLH	HLL
鶴と	LFL	4・3・#4・1・7	LHH	LFL	HLL
亀は	LLH	2・3・2・3・	LHH	LHL	LHL
亀の	HLL	1・1・77	HHH	LHL	LFLか
亀	LH	671・	LH	LH	LF

「鶴」は第5類で、京阪式LF、東京がHLである。Cの吉住小三郎の唄に2例HLが出るが、1例は京阪式で出現する。他の譜と唄では、京阪式の第5類を反映するとみてよいだろう。


「亀」は第3類で、本来ならば京阪では南北朝以降はHLのはずだが、江戸時代にHLの例があるものの、現代は鳥や動物名が第5類のアクセントになっているのと同様に、「亀」も「鶴」と同じLFのアクセントである。

東京の第3類はLH(L)の尾高型で、「亀」は山田美妙『日本大辞書』には尾高型例があるが、他の辞書類では第3類の例外で、「鶴」同様のHLである。


「亀」のHLは古い京阪式か新しい東京式かということになるが、明治34年の譜にHLが1例のみ現れ、この採譜は古い京阪式の可能性があるだろう。

以下、「鶴と亀」の部分の譜をみる。北村の明治34年の譜、田邊の昭和7年

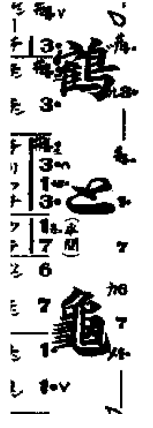
の譜いづれも「鶴と亀」は「LFLH」を示している。




北村季晴『長唄楽譜第貳集鶴亀』



田邊尚雄『世界音楽全集』巻34 春秋社
昭和7年





吉住小十郎編『長唄楽譜 鶴亀』昭和8年

小三郎譜については、大正13年の譜から「鶴」はHLで示しており、昭和8年の五線譜、昭和11年の録音でもHLである。「鶴と亀」のアクセントは次のような組み合わせが考えられる。

A芳村	
	ツル トー カ メ
B松永	
	ツル ト カ メ
C吉住	
	ツル ート カメー エ

- 古い京阪式 LFLHL
- 現代の京阪式 LFLLF
- 古い東京式 HLLLH
- 現代の東京式 HLLHL

古い京阪式と現代東京式の組み合わせはないが、Cの吉住小三郎の唄が古い東京式で、A 六代目芳村伊十郎、B 松永和風は現代の京阪式のメロディーで唄っていると考えられる。ただし、Bの松永和風は、昭和6(1931)年のコロンビアでは採譜のとおり「鶴」明確にLFを反映するが、孝次郎時代の昭和元年(1926)1月のニッポノフォン、同年10月のコロンビアでは、「鶴」がHLで「鶴と亀」を古い東京式のHLLLHのように唄っ

ている。

なお、「亀」については、大正7年に中内蝶二作、杵屋六四郎作曲で、新たに作られた「兎と亀」では以下のようにHLのアクセントで作曲されている。

The image shows musical notation for the phrase "かめ の あし で は" (Kame no Ashi de wa). The notation includes numbers (1, 2, 3, 4, 7) and symbols (H, L) above the characters, indicating pitch accents. For example, "か" has a 7 above it, "め" has a 2 with a 3 below it, "の" has a 2, "あ" has a 2, "し" has a 4, "で" has a 2, and "は" has a 7. There are also vertical lines and other symbols indicating musical structure.

左から2番目のみ例のみ「#1・2・2・」で、LHH のようであるが、他は「亀」がHL となるように作曲されていて、「鶴亀」に現れる「亀」とは現れ方が異なる。また、「兎」は第6類で古い東京式ではHLLで、現在はLHHだが、譜は「7#1・2・2・」でLHHを示す。第3類「足」も「あしでは2・#4・2・2・#1・7」でLHLLを反映し、東京式アクセントである。

長唄では作曲された時代のアクセントを反映し、それ以前のアクセントで作曲されるのではないということなのであろう。同じ語は同じアクセントで唄うということもしていない。

同じ近世邦楽でも義太夫節のように伝承地である大坂の幕末頃のアクセント、例えば、「残る・思う」などが現代のHHHではなく、古いHLLで復曲や、新曲にも使われるのとは異なる¹⁵。

[4-2] 3拍名詞LHL

現代の東京式アクセントではLHLの型が大幅に減少し、多くがHLLに変化をしている。第3類「鮑・岬・二十歳・山葵」や第5類「朝日・命・姿・涙・錦・枕」などがその例である。「鶴亀」にはどれくらい古い東京式アクセントのLHLが現れるのかを確認した。

しかし、「鶴亀」に出現する3拍名詞にもLHLのアクセントが多く聞かれるのだが、必ずしも東京式アクセントがLHLの語ではない。

¹⁵ 坂本清恵 (2015) 「人形浄瑠璃にみる江戸時代の音声」『日本語学』34(10)

LHL が現れるのは以下の例である。

本文	M34採譜	小十郎譜T	A芳村	B松永	C吉住
節会の	LHLL	6777	LHHH	LHHH	LHHH
いさごは	HHLL	2・3・67	LHLL	LHLL	LHLL
五百重の	LHLL	667644	LHLL	LHLL	LHHL
とぼそ	LHL	1・3・67	HHL	HHL	LHL
めぐみぞ	LHLL	4743	LHLL	HHLL	LHLL
みどりの	LHLL	1・1・1・71・	HHLL	HHLL	HHLL
白衣の	LHLL	6743	LHLL	LHLL	LHLL
時雨の	HLLL	6743	LHLL	HHLL	LHLL
はそで	HHL	33.7	HHL	HHL	LHL
ころもも	LHHL	1・3・1・1・	LHHL	LLHL	LHLL
よはひも	LHLL	3・#4・1・7	LHLL	HHLL	LHLL

本文	京(江)	京(日)	京(金)	美妙	国定	アクセ辞典	放	発音辞典	明国	明解	東(日)
節会の	2・1	1	n	0	n	n	0	0	n	0・2	0・2
いさごは	0	0	(0)	0	n	0	0	0	0	0	0
五百重の	n	n	n	n	0	n	n	n	n	n	n
とぼそ	0	0	n	0	n	0	0	0	0	n	0
めぐみぞ	n	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
みどりの	2・(2)	2	(2)	1	1	1	1	1	1	1	1
白衣の	n	1	(2)	0	n	2	0・1	2	1	1・2	1・2
時雨の	n	1	0	0	n	0	0	0	0	0	0
はそで	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n
ころもも	0	0	1	0	n	0	0	0	0	0	0
よはひも	2	0	1	0	0	2	2	2	2・0	2・0	2・0

「白衣(びやくえ)」は辞書では京都でも東京でもLHLであり、譜と唄ともに揺れがない。繰り返して唄うが、アクセントは変わらない。

「節会」と「よはひ(齢)」に東京の辞書にLHLの辞書例がみられる。「よはひ」は早稲田語類が第4類であり、京阪式であればHHLかHLL、もしくはLHLもあるか。「節会」は明治34年の譜のみLHLで、他はLHHで唄い方が異なる。

「みどり(緑)」は早稲田語類が第2類であるが、京都でLHLとHHL、東京ではHLLである。これも明治34年の譜のみLHLである。

「いさご・ころも」は第1類であり、LHLは京都、東京ともにアクセントとは合わない。

「時雨」は、明治34年の譜がHLLで京阪式アクセントと合っているが、松永HHL、他はLHLである。

「はそで(羽袖)」は確例はないが、「は(羽)」が早稲田語類が第2類相当で、「そで(袖)」が第1類なので、同様の例の「羽蟻」が『和名』にHHLがあり、京阪式アクセントは古くHHLである。他がHHLで唄うのに対して、C吉住小三郎が唄い方をHHLからLHLに変えたとみてよい。

松永和風は他がLHLのところを、「とぼそ・みどり・よわひ」をHHLで唄い、京阪式アクセントに合う。

明治34年譜と松永和風の唄い方は同じではないが、それぞれ京阪式アクセントが現れることが多い。「鶴亀」でのLHLは古い東京式を反映したアクセントとして唄われているとはしにくい。

5. おわりに

これまで、金田一氏によって「長唄の旋律は歌詞のアクセントを尊重するあまり、ある語句のアクセントが時代につれて変化を起こすと、旋律も従って変化することがあるようである。」と紹介されてきた¹⁶。その根拠は、長唄「鶴亀」の「メノウ」の唄いがアクセント変化によってLHLからHLLに節付けが改められたことによるものであった。

本稿では、長唄によるアクセント研究の可能性を探るために、明治から昭和にかけて出版された譜と録音資料を確認したが、「メノウ」は古いものがHLLで、LHLに改変されたことがわかった。これは、長唄が劇場音楽から離れ、独立した演奏をするようになった際に、本居長世や半井桃水などの助言によって東京式アクセントを取り入れて唄うようになったためではないかと推測される。

長唄「鶴亀」は幕末の江戸で作曲されたにもかかわらず、古い資料には京阪式アクセントの反映がみられる。特に古い唄い方の松永和風の唄や、明治34年の採譜には京阪式アクセントも多く現れる。作曲がいつか、どのような音曲から取り込んだのかによっても曲に反映するアクセントが変わってくる。

音楽資料から作曲当時のアクセントを探るには、譜本が残されていることが重要であるもわかった。長唄の場合には、小十郎譜が実質上は譜本の始まりであり、明治以前のアクセント資料にはしにくいように思う。今後、長唄によるアクセント研究としては、小十郎譜が書かれた大正期の新曲について、作曲当時の東京アクセントが反映するのか検討してみたい。

—日本女子大学 文学部—

16 [引用1]

[資料]長唄「鶴亀」の譜や歌に反映するアクセントと京都・東京アクセント

本文	M34採譜	小十郎譜T	A芳村	B松永	C吉住	京(江)	京(日)	京(金)	美妙	国定	アク	放	発音	明国	明解	東(日)
それ	LH	67	LH	LH	LH	0・1	1	0	1	1	n	1	1	1	1	1
青陽の	HHHHH	77777	HHHHH	HHHHH	HHHHH	n	n	n	0	n	n	n	n	n	n	n
春に	LLH	773・	LLH	LLL	LLH	(2)	(2)	(2)	1・2	1	1	1	1	1	1	1
なれば	HFL	767676	HHL	HHL	HHL	(0)	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1	1	1
四季の	LHH	2・3・3・	LHH	LHHヒ	LHH	n	(0)	(0)	2	2	0	2	2・0	2	2・1	2・1
節会の	LHLL	6777	LHHH	LHHH	LHHH	2・1	1	n	0	n	n	0	0	n	0・2	0・2
事はじめ	HHLLL	4・4・3・2・3・4・3・4・2・3・767	HHHLL	HHHLL	HHHHL	2	3	3	3	n	n	3	n	3	3	3
不老門にて。	HHLLLLL	1・7676344333	HHLLLLL	HHLLLLL	HHLLLLL	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	2
日月の	HLLLL	1・7772・3・	HLLLL	HLLLL	HLLLL	n	1	1	0	0	n	0	n	2・0	0・2	0・2
光を	HHLL	2・4・3・3・1・3・	LHHL	HHLL	LHHL	2	1	1	3	2	3	3	3	3	3	3
君の	HHH	7#1・2・#1・7・#1・	LHH	HHH	LHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
叡覧にて	LHHLLL	355#41・7	HHHHLL	HHHHLL	LHHHLL	2	0	n	1	n	n	0	0	n	n	0
百官	LHHH	6777	LHHH	LHHH	LHHH	n	0	(3)	n	n	n	0	n	0・3	0・3	0・3
卿相	LHHH	6677	LHHH	HHHH	LHHH	n	n	n	0	n	n	n	0	n	n	n
袖を	LHL	673	LHL	HHL	LHL	0	0	0	0	n	0	0	0	0	0	0
連ぬ	LHL	71・77	HHH	HHL	HHL	0ヌル	0	0	0	n	3ネル	3	3	3	3	2
其の	LH	67	LH	LH	LH	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
数	LH	71・	HH	HH	LH	(0)	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1	1	1
一億	LHLL	1・#4・7757	HHHHH	LHLL	LHLL	0	0	n	n	2	n	n	n	n	2	2
百余人	LHLLL	571#4#433	HHLLL	HHLLL	LHLLL	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n
拝を	LHH	566	LHH	LHH	HLL	n	1	1	n	n	n	1	n	1	1	1
すすむる	LHHH	566#47	LHHH	LHHH	LHHH	0ムル	0	0	0	n	0	0	0	0	0	0
万戸の	LHHHマ	61・77	HHLLバ	HHLLマ	LHHLバ	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	1バ
声	HL	764	HL	LL	HL	(2)	(2)	(2)	1	1	n	1	1	1	1	1
一同に	HLLLL	264233	HHHHH	HHHHH	LHHH	0・2	0	0	3	0	0・2	3	0・3	3	3・2	3・2
拝する	LLHH	66777	LHHH	LLHH	LHHH	(0)室町スル	0	0	1ス	n	3	3	3	3	3	3
其の	LH	67	LH	LH	LH	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
音は	HLL	7#4676	LHH	LLH	LLH	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
天に	LHL	677671・46	LHL	LHL	LHL	1	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1
響きて	LHHL	33#4#4#43	LHHH	LLHH	LHHH	推定1	0	0	3	n	2	2	2	2	2	2
おびただし	LHLLL	77553#4#461*6*7	HLLLL	HHLLLタンダ	HHLLL	4シ	4シ	3	4シ	0キ	5	5イ	0・5	5イ	5	4シ
庭の	LHH	2・3・4・	LHH	LHH	LHH	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
いさごは	HHLL	2・3・67	LHLL	LHLL	LHLL	0	0	(0)	0	n	0	0	0	0	0	0
金銀の	HLLLL	3・1・3・772・	LLLLH	HLLLL	HLLLL	1	1	1	n	n	1	1	1	1	1	1
玉を	HLL	3・#4・#4・	LHH	LHH	LHH	1	1	(0)	2	2	2	2	2	2	2	2
連ねて	LHLL	3・#4・77	LHLL	LHLL	HLL	0ヌル	0	0	0	n	3ネル	3	3	3	3	2
きたへの	LHHHH	671・1・7767	LHHHH	LHHHLヒ	LHHHH	n	n	n	3	n	n	n	n	n	n	0
五百重の	LHLL	667644	LHLL	LHLL	LHHL	n	n	n	n	0	n	n	n	n	n	n
にしきや	HLLL	7667	HHHH	LHHH	LHHH	1	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1

[資料]長唄「鶴亀」の譜や歌に反映するアクセントと京都・東京アクセント

本文	M34採譜	小十郎譜T	A芳村	B松永	C吉住	京(江)	京(日)	京(金)	美妙	国定	アク	放	発音	明国	明解	東(日)
瑠璃の	LHH	2・4・4・	LHH	LHH	LHH	n	1	0	0	n	0	0	0	0・1	0・1	0・1
とぼそ	LHL	1・3・67	HHL	HHL	LHL	0	0	n	0	n	0	0	0	0	n	0
しゃこの	LHH	2・2・72・	HHH	HHH	HHH	n	n	n	1・2	n	n	n	1	1	1	1
行桁	LHLL	2・3・76	LHLL	LHLL	LHLL	n	n	n	n	n	n	0	n	n	n	0
瑪瑙の	HLLL	7555	HLLL	HLLL	HLLL	1室町	(2)	1	2	n	2	2・1	2	2・1	2・1新	2・1
橋	LL	3#4	LL	LL	LL	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
いけの	HHH	777	HHH	HHH	HHH	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
みぎはの	HHL	677#4	HHHL	HHHL	LHHL	2	0	0	3	n	0	3	0・3	3・0	0・3	0・3
鶴亀は	LHLL	4・4・3・772・3・	HLLL	HLLL	HLLL	n	(2)	(2)	n	n	1	1	1	1	1	1
蓬莱山も	LLLHLLL	6777443	LHHLLL	LHHLLL	LHHLLL	n	(4)	3	3ザン	n	3	3	3	3	3	3
よそ	LH	34	HH	HH	LH	1	1	1	2	n	2	2	2	2	2	2
ならず	HHL	443	HHL	HHL	HHL	n	n	n	n	n	n	n	n	1	1	n
君の	LHH	2・3・#4・	LLH	LHH	LHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
めぐみぞ	LHLL	4743	LHLL	HHL	LHLL	n	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ありがたき	HHLLL	2・4・3・3・2・3・676	LLHHL	LHHHL	LHHHL	3室・2江	4シ	3・4イ	3シ・4イ	3	n	4イ	4	4イ	4イ	3・4シ
いかに		676	LHH	LHH	LHH	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
奏聞		72・2・2・	LHHH	HHHH	HLLL	n	0	0	1	n	n	0	0	0	0	0
申すべき		672・76	LHHHL	LHHHL	LHHHL	1	1・0	0	1	1	1	1	1	1	1	1
事の		672・	LHH	HLL	LHH	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
候		#2・776	HHHH	LHHH	HHHH	0	0	0	3	n	3	3	3	3	3	3
奏聞とは		72・2・2・2・7	LHHHHH	LHHHHLL	LHHHHLL	n	0	0	1	n	n	0	0	0	0	0
何事ぞ		72・2・2・7	LHHHH	LHHHH	LHHHH	(0)	(0)	(0)	n	0	0	0	0	0	0	0
毎年の		67777	LHHHH	LHHHH	LHHHH	n	(0)	(0)	n	n	0	0	0	0	0	0
嘉例の		72・2・2・	LHHH	LHHH	LHHH	n	n	(0)	1	n	n	0	0	0	0	n
如く		2・76	HLL	HHL	HLL	1	1	n	1シ	1	1	1シ	n	1シ	1ゴトシ	n
鶴亀を		3・2・777	HLLL	LHHHH	HLLL	n	(2)	(2)	n	n	1	1	1	1	1	1
舞はせられ		72・3・#1・5	LHHHH	LHHHH	LHHHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
其の		67	LH	LH	LH	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
後		76	HH	HH	HH	1・0	0	0	2	n	2	0	2	2・0	2・0	2・0
月宮殿にて		6 2・76672・	LHHHHHHL	LHHHHHHL	HHHHHLLL	n	4	n	3・4	n	3	3	n	n	3	3
舞楽を		2・777	HLLL	HLLL	HLLL	1	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1
奏せられうずるにて		67777772・7	LHHHHHHHHH	LHHHHHHHLH	LHHHHHLLH	1	1ス・0スル	0スル	1	n	3スル	3	1	3	3スル	1ス・3スル
候		7766	LHHH	HHHH	LHHH	0	0	0	3	n	3	3	3	3	3	3
ともかくも	HLLHH	643776	HLHHH	HLLHH	HLLHH	n	(2)	n	1	n	1	1	1	1	1	1
はからひ	LHHL	6774	LHHL	LHHL	LHHL	2	0	0	3	n	3	3	3	3	3・0	3
さふら。へ	LHHL	467742323	LHHL	LHHL	LHHL	0	0	0	3	n	3	3	3	3	3	3
亀は	LLH	2・3・2・3・	LHH	LHL	LHL	1	(2)	(2)	2	1	1	1	1	1	1	1
万年の	LHLLL	7#4・5・777667	HHHLL	HHL	LHLLL	1	1	1	n	n	0	1	1	1	0・1	0・1
よはひを	LHHH	33233#43#431*7+6	LHHH	LHHH	LHHH	2	0	1	0	n	2	2	2	2・0	2・0	2・0

[資料]長唄「鶴亀」の譜や歌に反映するアクセントと京都・東京アクセント

本文	M34採譜	小十郎譜T	A芳村	B松永	C吉住	京(江)	京(日)	京(金)	美妙	国定	アク	放	発音	明国	明解	東(日)
経	L	*7	L	L	L	(0)フル	(0)・0	(0)	1	n	1	1	1	1	1	1
鶴も	LHL	3・3・2・3・3・#4・3#4・3・	LFL	LHL	LFLか	(2)	(2)	(2)	1	1	1	1	1	1	1	1
千代をや	LHLL	1・#47667	HHL	LHLL	LHLL	(0)	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1
重。ぬらん	LLHHH	33233#4*77643467	LHHHH	LHHHH	LHHLL	0	0・1ヌ	0	0	n	0	0	0	0	0	0ヌ
千代の	LHH	777	LHH	LHH	HHH	(0)	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1
ためしの	LHHH	3#4・\$4・7	LHHH	LLLH	LHHH	2	1	1	3	0・2	3	3	3	3	3	3
数々に	LHLHL	71・7#1・6767	LHHLL	HHHHL	HHHLL	(2)	(2)	(2)	1	0	1	1	1	1	1	1
何を	HHH	1・1・1・7	LHH	HHH	HHH	(0)	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1	1	1
引かまし	LHLL	71・757#4	HHLL	LHHL	LHHL	0	0	0	0	n	0	0	0	0	0	0
姫小まつ	LHHLL	3・5・7・5・#4・#4・3・3・#4・3・#4・	LHHLL	LHHLL	LHHLL	n	3	3	3	n	3	3	n	3	3	3
よはひに	LHHH	3・5・5・#4・5・	LHHH	LHHH	LHHH	2	0	1	0	0	2	2	2	2・0	2・0	2・0
比ふ	HHH	3・5・5・#4・3	LHL	LHH	LHH	推定1	0	n	2	n	n	2	n	2	2	2
丹頂の	LLHLL	673・#4・767#4	LHLLL	HHHLL	LHLLL	n	0	0	0	n	n	0	0	0	0	0
鶴も	LLH	#43#47	LLH	LLH	HLL	(2)	(2)	(2)	1	1	1	1	1	1	1	1
羽そでを	LLHL	3#4316767	LHHH	LHHH	LLHH	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n
たをやかに	LHLLL	3#431#43#4	LHLLL	LHHHL	LHLLL	n	3	2	2	n	n	2	n	2	2	2
千代を	LHH	5・5・5・#4・3・	HHH	HHH	HHH	(0)	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1
かさねて	HLLL	671・776	HLLL	LHHH	LHHH	0	0・1ヌ	0	0	n	0	0	0	0	0	0カサヌ
舞ひ	LH	3・#4・3・#4・	LH	HH	LH	0	0	0	0	0	0	0	n	0	0	0
あそぶ	LHL	1・71・3・#4・77	LHL	LHH	LHH	0・(0)	(0)	(0)	0	0	0	0	0	0	0	0
みぎりに	LHHL	3#4#43#4	LHHH	LHHHH	LHHH	推定2	0	0	1	n	0	0	0	0・3	0・3	0・3
繁る	LHH	71・71・	HHH	LHHH	LHH	n	0	0	2	2	2	2	2	2	2	2
呉竹の	HHLLL	3・#4・6767	LHLLL	LHLLL	LHLLL	n	0	2	2	n	n	2	n	2	2	2
みどりの	LHLL	1・1・1・71・	HHLL	HHLL	HHLL	2・(2)室町	2	(2)	1	1	1	1	1	1	1	1
亀の	HLL	1・1・77	HHH	LHL	LFLか	1	(2)	(2)	2	1	1	1	1	1	1	1
いく	LH	767	LL	LH	HL	n	(0)	n	1	n	n	n	n	n	1	1
よろづ代も	LHLLL	3・4・3・3・2・3・#4・3・776	LHHLL	LHHHL	HHLLL	n	0	n	n	1	n	n	0	3	n	3
池水に	LHLLL	61・7557#4	LHHHL	LHHHL	LHLLL	n	n	n	2	n	2	2	n	n	n	2
住めるも	LHHH	671・7#4・3・	LHHH	LHHH	LHHH	(0)	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1	1	1
安き	HHL	5・5・#4・	LHL	LHH	HHL	1キ	(2)シ・1イ	1	1シ	2イ	2	2イ	2	2イ	2	1シ・2イ
君が	LHH	1・3・3・#4・	LHH	LHH	LHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
代を	HL	・3・77	HL	LL	HH	0	0	0	0	n	0	0・1	1	1・0	1・0	1・0
仰ぎ	HHL	7755	HLL	HLL	HLL	0・1	0	0	2	2	2		2	2	2	2
奏でて	LHHL	35#4#4#4	HHLL	HHHL	LHHL	(0)カナズ	0ズ	0	0	n	n	3	3	3	3	2ズ
鶴と	LFL	4・3・#4・1・7	LHH	LFL	HLL	(2)	(2)	(2)	1	1	1	1	1	1	1	1
亀	LH	671・	LH	LH	LF	1	(2)	(2)	2	1	1	1	1	1	1	1
よはひを	HHLL	56777	HLLL	HHHH	LHHH	2	0	1	0	0	2	2	2	2・0	2・0	2・0
授け	HHH	677	LLH	LLH	LHH	2クル	0	0	0	n	3	3	3	3	3	3
たてまつれば	HHHHHH	677777	HHHHHH	LLHHHH	LHHHHH	(0)	(0)	(0)	4	0	4	4	4	4	4	4

[資料]長唄「鶴亀」の譜や歌に反映するアクセントと京都・東京アクセント

本文	M34採譜	小十郎譜T	A芳村	B松永	C吉住	京(江)	京(日)	京(金)	美妙	国定	アク	放	発音	明国	明解	東(日)
君も	HLLH	671・	LHH	HHH	LHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
御かんの	LHHLゴ	671・7・	LHHH	LHHHゴ	LHHH	n	n	n	1・2	n	0	0	0	0	n	0
あまりにや	LHLLL	6771・7	HHHHL	LHHHH	LHHHH	2	1	1	3	n	3	3	3	3	n	3
舞楽を	HLLL	755#4	HLLL	HLLL	HLLL	1	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1
奏して	LLHH	571・1・	LLHHジテ	HHHHジテ	LLLH	1	1ス・0スル	0スル	1	n	3スル	3	1	3	3スル	1ス3スル
舞ひ	LH	2・4・	HL	HH	HH	0	0	0	0	0	0	0	n	0	0	0
たまふ	HLL	2・74・1・543・	HLL	HHL	HLL	2	0	0	2	2	3	2	3	2	2	3
月宮殿の	LLHHHLL	6777743	LHHHHLL	LHHHHLL	LHHHHLL	n	4	n	3・4	n	3	3	n	n	3	3
白衣の	LHLL	6743	LHLL	LHLL	LHLL	n	1	(2)	0	n	2	0・1	2	1	1・2	1・2
たもと	LLH	667	LHH	LHH	LHH	2	(2)	1	3	0	3	3	3	3	3	3
月宮殿の	LLHHHLL	6777743	LHHHHLL	LHHHHLL	LHHHHLL	n	4	n	3・4	n	3	3	n	n	3	3
白衣の	LHLL	6743	LHLL	LHLL	LHLL	n	1	(2)	0	n	2	0・1	2	1	1・2	1・2
たもと	LLH	667	LHH	LHH	LHH	2	(2)	1	3	0	3	3	3	3	3	3
色色	LHHL	3443	LHHL	LHHL	LHHL	n	(0)・(4)	(0)	0	0	0	0	0	0	0	0
妙なる	LHHL	3443	LHHL	LHHL	LHHL	0	1	n	1	n	n	1・2	1	1・2	1・2	1・2
花の	LHH	3・4・4・	LHH	LHH	LHH	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
そで	HL	3・2・72・	LH	LH	LH	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
秋は	LHH	767	LHH	HHH	HLL	(2)	(2)	(2)	1	1	1	1	1	1	1	1
時雨の	HLLL	6743	LHLL	HHLL	LHLL	n	1	0	0	n	0	0	0	0	0	0
紅葉の	LHHL	7643	LHHL	LHHH	HLLL	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
はそで	HHL	33.7	HHL	HHL	LHL	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n
冬は	LHH	677	LHH	LHH	LHH	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
冴え	HH	67	LH	HH	LH	1ユル	(0)	(0)	2	n	2	2	2	さえゆく3・1	2	2
ゆく	HL	76	HH	HH	HH	0	0	0	0	n	0	0	0	0	0	0
雪の	LHH	61・1・	HHH	LHH	HHL	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2
たもとを	LLHL	6764	LHHL	LHH・	HHHL	2	(2)	1	3	0	3	3	3	3	3	3
ひるがへす	LHHLL	1・3・3・1・1・	LHHLL	LLHLL	LHHLL	3	0	0	3	n	3	3	3	3	3	3
ころもも	LHHL	1・3・1・1・	LHHL	LLHL	LHLL	0	0	0	0	n	0	0	0	0	0	0
薄むらさきの	LHHHLLL	3・#4・3・1・3・3・1・1・	LHHHHLL	LHHHLLL	HHHHHLL	n	3	4	n	n	4	5	4	n	4	4
雲の	HLL	#4・3・1・	HLL	HLL	HLL	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1・2許容	1
上人の	LHHHH	71・1・1・7	HHHHL	HHHHL	LHHHH	n	n	n	n	n	n	n	0	n	n	0
舞楽の	HLLL	7#4#46	HLLL	HLLL	HLLL	1	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1
声々に	LHHHH	76677	LLLLH	LLLLH	LHHHH	(2)	(2)	(2)	1	0	n	2	n	2	2・3	2・3
霓裳羽衣の	LHHHHLL	4444674	LLHHHL	LHHHHHL	LHHHHHL	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n
曲を	LHH	2・3・4・3・	LHH	LHH	LHH	n	0	0	0	n	0・1	0・1	n	1・0	1・0	1・0
なせば	HLL	3・766	HLL	HLL	HLL	(0)	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1	1	1
山河	HHL	6#4#4	HHH	HHH	HHH	n	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1
草木	LHHH	#4666	LHHH	HLLL	LHHH	n	0	0	n	n	1	1	1	1	1・0	1・0
国土	HHL	71・7	HHH	HHH	LHH	n	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1

[資料]長唄「鶴亀」の譜や歌に反映するアクセントと京都・東京アクセント

本文	M34採譜	小十郎譜T	A芳村	B松永	C吉住	京(江)	京(日)	京(金)	美妙	国定	アク	放	発音	明国	明解	東(日)
ゆたかに	HHHL	1・3・1・1・7	HHHL	HHHL	HHHL	(2)	(2)	(2)・1	1	1	1	1	1	1	1	1
千代	LH	#4・#4・	LH	LH	LH	(0)	1	1	1	n	1	1	1	1	1	1
よろづ代と	HHHHL	3・#4・#4・#4・2・	LHLL	HHLL	HHLL	n	0	n	n	1	n	n	0	3	n	3
舞ひ	HL	1・3・	HH	HH	LH	0	0	0	0	0	0	0	n	0	0	0
たまへば	HHHL	1・1・1・7	HHHL	HHHH	HHHL	1	0	0	2	2	2	2	2	2	2	2
官人	LHHL	677#4	LHHL	HHHL	HHHL	n	n	n	0	n	n	n	n	n	n	0
駕輿丁	LHHL	#4#4#4#4	LHHH	HHHH	HHHH	n	n	n	0	n	n	n	n	n	n	n
御輿を	LHHL	4666	HHHH	LLHH	HHHH	2	1	1	1・0	n	0	0	0	0	0・1新	0・1
早め	LLH	676	LHH	HHH	LHL	n	0	0	3	n	3	3	3	3	3	3
君の	LHH	2・3・3・	LLH	LHH	LHH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
よはひも	HHHH	2・3・3・3・	HHHH	HHHH	LHHH	2	0	1	0	0	2	2イ	2	2・0	2・0	2・0
長生殿に	LHHHHHH	1・#4・#4・#4・#4・#4・3・	HHHHHHH	LHHHHHH	LHHHHHH	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	3
君の	LHL	3・#4・#4・	LHH	LLH	LHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
よはひも	LHLL	3・#4・1・7	LHLL	HHLL	LHLL	2	0	1	0	0	2	2	2	2・0	2・0	2・0
長生殿に	LHHHLLL	671・1・7767	LHHHHHH	LHHHHHH	LLHHHLL	n	n	n	n	n	n	n	n	n	n	3
還御	HHL	3・#4・#4・	LHH	LHH	LHH	1	1	1	1・2	n	n	1	1	1	1	1
なるこそ	HLLL	#4・1・1・767	HHLL	LLLL	HLLL	(0)	(0)	(0)	1	1	1	1	1	1	1	1
めでたけれ	LHLLL	6763323323	HHHLLL	HHLLL	LHHLL	2キ	3シ・2イ	2シ	2シ・3イ	2ク	3・0	3イ・2シ	3	2	2・3新シ	2シ・3イ